

2005年9月19日発行 (隔週月曜日発行) 第805号 1976年4月23日第三種郵便物認可

日経アーキテクチュア

NIKKEI
ARCHITECTURE

2005 9-19

特集

発注者が気にし始めた
サステナブル建築

topics

アスベスト問題にどう対応するか

series

ユニバーサルデザイン実践塾

失敗に学ぶ デテール編

匠の視座 石工職人

柏の葉キャンパス駅 (千葉県柏市)

close up

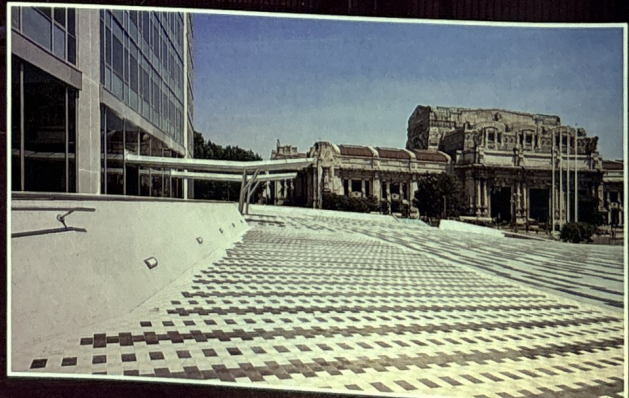
海外

ピレリ・ビル改修 — イタリア・ミラノ

ミラノ中央駅前に建つ。商
都ミラノのシンボルの存在
(写真: Renato Sarno Group)



PATIO
LUBRIFICANTI
IBENO
29.518.123



エントランス前のヒル・ブラ
ザ (イタリア名はコリーナ・
ピアッサ)。この床面のタイ
ルも洗浄し、張り直した

改修設計: レナート・サルノ・グループ

飛行機事故を機にオリジナル尊重の改修

イタリアの商都、ミラノ中心部の高層ビルに2002年4月18日午後6時少し前、小型プロペラ機が衝突した。日本の新聞の一面にも載ったので、記憶している人も多いだろう。ミラノ市民には「ビレローネ」という愛称で知られていたこの高さ127m、31階建てのビルは、タイヤメーカーのビレリ社が建築家のジオ・ボンティ氏（1891-1979）に依頼し、1959年に完成したものだ。以来、ミラノのシンボルでもあった。

1980年代には、ビレリ社から、ミラノを州都とするロンバルディア州の政府事務所の所有に移り、当時は約1700人がビル内で働いていた。機体は26階の辺りで炎上し、死者は操縦士と従業員

員合わせて3人、負傷者は付近の通行人など約70人。当日、その階の近辺で電気・機械関係の修繕が行われ、使用されていなかったこともあって、事故の重大さの割には、被害が広がらずに済んだ。

サッシやタイルは洗浄して再利用

ビルの躯体は予想以上に頑強で、ほとんどびくともしなかった。ただ、完成から半世紀近い年月を経て、老朽化はかなり進んでいた。また、所有者が州政府になってから内部も色々と改造され、空調、配管、防災、IT対応などの設備は明らかに更新が必要な時期に差し掛かっていた。このため、飛行機事故をきっかけに、大幅な改修計画

が持ち上がることになった。

当初は、全く新しいものに建て替えてはどうか、との意見もあったという。しかし、外装も内装もボンティ氏が完成させた当時の姿に戻し、オフィス家具や諸設備のみを今の時代に合ったものに変える、というミラノの建築家、レナート・サルノ氏の提案が最終的に通ることに。

サルノ氏は、ミラノとニューヨークにスタジオを持つ建築・エンジニアリング会社「レナート・サルノ・グループ」の筆頭建築家だ。同社は、1998年にこのビルの31階展望ホールの改修設計をコンペで勝ち取って進めてきた経緯があるため、事故後の改修も依頼されていた。



工業製品による近代的な外観であると同時に、工芸的な表情も併せ持つ

展望ホールの仕事を通じてピレリ・ビルの価値を認識していたサルノ氏は、躯体も建材もできるだけオリジナルのものを再利用することを主張した。「再利用を主張した一つの理由は、使われていた建材の多くが、当時、コストを度外視して実験的につくられたものなので、再生産することが不可能でもあったからだ」と言う。新たに調達したのは窓ガラスが主体。そのガラスとは当時、サンゴバン社が初めてつくったサーモパン（断熱二重ガラス）で、縦

横1.5mのサイズを使った画期的な試みだった。

窓枠のアルミ材も、事故で破壊されたもの以外はすべて洗い直し、再びはめ込んだ。1200m²に及ぶ外壁のセラミックタイルや、前面広場のタイルもすべて一度はがし、磨き直して再び張った。事故によって26階のスラブ部分が壊れたが、これは下から持ち上げるような構造体を加え、元に戻した。「ビルの躯体には問題がなかったことが幸いした」と、サルノ氏は語る。

内装についても、ロビーまわりや並行して別に進んだ大講堂など、ポンティ氏の設計がよみがえった。

黄色地に黒や白の色合いが混じる鮮やかなリノリウムの床は、ゴムを製造するピレリ社の素材を、ポンティ氏が採用したものの。カーペットなどの下に隠れていたのだが、再び床の表に見せるようにした。オフィス家具や諸設備は一新されたが、それらはオリジナルの内装と違和感なく共存するように配慮されている。

現在、ミラノでは大掛かりな再開発計画が進み、2010年までにかなりの数の高層建築が生まれる。その多くにかかわっているというサルノ氏にとって、ピレリ・ビルの改修を通じて「建築の心」を獲得したことが、力強いバックボーンになっているという。

(篠田 香子=フリーライター)



2002年4月、小型プロペラ機の衝突事故によって損傷。躯体には大きな被害影響は出なかった



損傷を免れたアルミ枠などは洗浄し、オリジナルに忠実となるように再利用した

●Restoration of the Pirelli Skyscraper

所在地 via Fabio Fizzi, 22, Milan, Lombardia, Italy
 発注者 Regione Lombardia
 総改修費 4500万ユーロ

【外壁・中庭・内装】(改修)

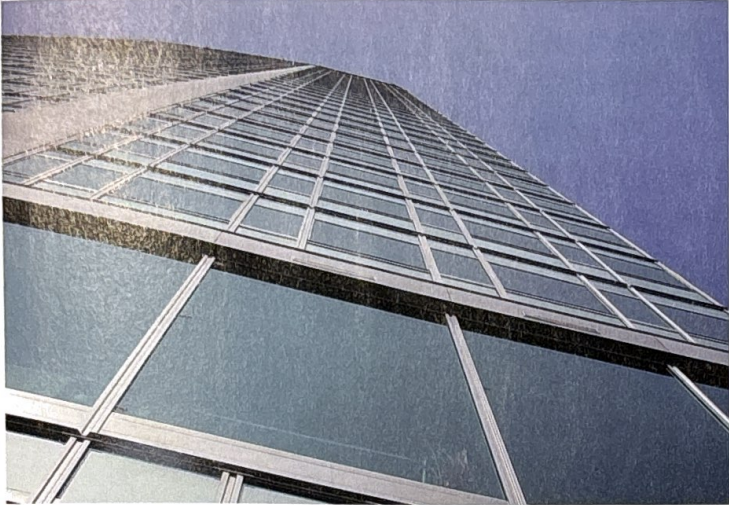
設計 Designers: Renato Sarno Group, Corvino + Multari Architetti Associati
 Collaborating architects: Renato Sarno Group, Gruppo Progetti
 施工 Impresa Costruzioni Grassi e Crespi, Marcora Costruzioni, ISA
 施工期間 2003年~2005年

【大講堂】(改修)

設計 Designers: Corvino+Multari Architetti Associati, Collaborating architects: Gruppo Progetti
 施工 La Manutenzione, Eleca
 施工期間 2002年~2004年

【31階展望ホール】(改修)

設計 Designer, Collaborating architects: Renato Sarno Group
 施工 Impresa Costruzioni Grassi e Crespi, Marcora Costruzioni, ISA, Eleca
 施工期間 2002年~2004年



左はカーテンウォールの見上げ。右は事故に遭った27階に設けられた追悼スペース。ピレリ社製のオリジナルのリノリウム床が、唯一の装飾的な要素だ



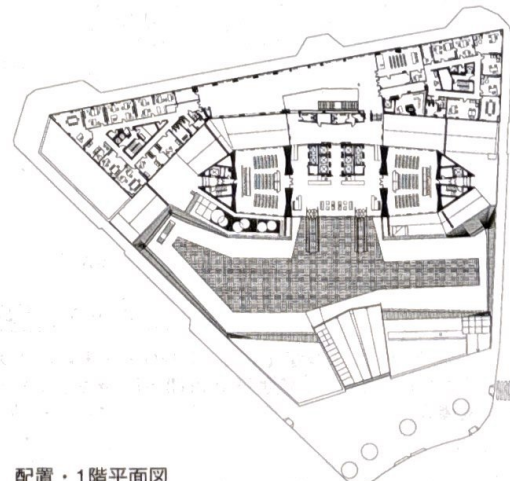
左は1階のエントランスロビー。家具を減らし、すっきりと整理した。上階のオフィスを含めて家具はサルノ氏が新たに選んでいる。右はヒル・プラザの見下ろし。大講堂はヒル・プラザの下にある



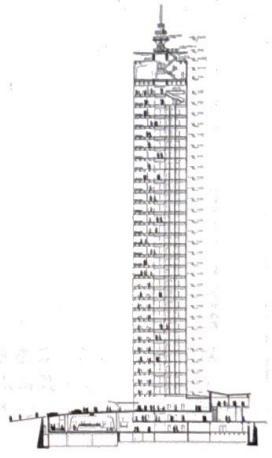
両脇がすぼまった形になっている。ジオ・ポンティ氏は、クリスタル石の形状をイメージしていたという。



基準階平面図



配置・1階平面図



断面図

復元 | 近代高層建築のコンセプトに学ぶ

ビレリ・ビルは、ジオ・ボンティ氏を筆頭に、イタリアを代表する構造家のピエール・ルイージ・ネルヴィ氏らが加わって設計。1955年から4年あまりを費やして建設された。

発注者のビレリ社は、多岐にわたる分野に事業拡大している時期でもあり、「今の時代の最高峰の高層コンクリート建築を」というリクエストだった。建材のいくつかについて、ビレリ社が自ら生産するという力の入れようだった。

ガラス工芸や陶磁器のデザインも手がけ、芸術家でもあったボンティ氏のもとに、構造、設備などの専門家のチームが生まれ、伝統と革新をモットーに「イタリア随一の近代高層建築」をつくるプロジェクトがスタートした。「デザイン、技術、資材、この三つの要素によって完成された建築を目指す。フォームとしては、クリスタル石のようなものを」と、当時のボンティ氏は語っている。

イタリア初の高層ビルの建設は、ち密に計画され、事故などもなく完成。発注者は



レナート・サルノ氏。ニューヨークにもスタジオを持ち、国連本部の改修（2002年提案、2004年完成）を手がけたほか、イタリア国内でも多くの改修プロジェクトに携わってきた。
<http://www.renatosamogroup.com/>

はもちろん、地元ミラネーゼたちに喜びを持って迎え入れられ、近代建築の成果として世界的にも賞賛された。その後、今日に至るまでこのビレリ・ビルはミラノ随一の高層建築で、シンボルとして変わらぬ姿をとどめてきた。

「ビルの形態においても、ファサードのデザインにおいても、ボンティ氏の残したものは時代を超えるスタイルと、それを貫くコンセプトがある。改修工事の基本として、私たちはまず、そのボンティ氏のコンセプトを勉強するところから始めた」と、サルノ氏は語る。

「それぞれの建材を解体・検証し、改めて組み立てていく作業は、考古学的に土器を再現することにも似ていた。学生のころの気持ちに戻って謙虚に学んでいかなければ、先に進めないと感じていた。半世紀前の建築をここまで忠実に再現し、再使用可能にした改修工事は、非常に珍しいのではないかと。こうした工事は、新築するよりも大変な作業となる。高度な建設技術のみならず、イタリアならではの職人芸も大きく貢献し、無事に実現できた」。

目の前のデスクの上に記念に残されている古いサッシ枠の一片を手に取りながら、サルノ氏は淡々と語る。「現代の建築においては、高度なテクノロジーや、建築家の自己主張といったものが先走りする傾向がある。過去の偉業を再現することが、そうした状況を見詰め直す機会を与えてくれた」。



サルノ氏が手がけ、先に改修が終わっていた31階の展望ホール「ベレパペレ」。ミラノを一望にできる。建築の構造体の様子がよくわかるように、躯体をむき出しのままとしている



地下階の大講堂。こちらは2002年から2年を費やして改修を実施。コルヴィノ+ムルタリの手によって、ボンティ氏によるオリジナルの内装に戻された。空調設備やIT関係、セキュリティー関係などのシステムについては最新のものを導入